



審査委員長 新井 紀子氏



国立情報学研究所 社会共有知研究センター センター長・教授
一般社団法人教育のための科学研究所 代表理事・所長

■ 総評

私は法学部出身です。数学科で学んで数学者になり、人工知能やソフトウェア開発企業と連携した仕事もしています。その中で、日本語教育ということでリーディングスキルテストというツールを作りました。日本語を読み書きでき、市民社会に参画できる人を育成するというプロジェクトにもかかり、トヨタシステムズにもご支援いただいています。

この受賞会場に着いた瞬間、なんて多様な人が集まっているのだろうとすごく嬉しい気持ちになりました。バックグラウンド、ジェンダー、年齢、本当に素敵な第 1 回目の論文コンテストになったと思っています。今日みなさんお集まりになり、実際に多様性を感じられたと思います。お互いにプレゼンを聴きながら学びあえた時間で、この場自体がアクティブラーニングだったと思います。

■ 講評 岡山大学 大学院 ホアン・ゴック・ビクチャンさん

SDGs は国際とか環境とか、大きいことしなくてはというイメージがあります。しかしながら、実は身近なところから、市民社会として成熟していくことが、持続可能な社会につながるに違いないという確固たる信念をお持ちでした。その信念の中でまず自分にできることから活動し、活動だけではなくその活動を理論化していく、その力に大変感銘を受けました。

■ 講評 金城学院大学 吉田 光里さん

コロナ禍で活動が制約される、ある意味残念な 4 年間だったと思います。学生時代をつまらないものにしてしまった学生が少なくない中、できることをやろうという元気さに、本当に刺激を受けました。本当にまぶしいプレゼンでした。卒業後もその明るさとバイタリティーで名古屋から日本を、そして世界を変えてほしいと思います。

SDGs 学生論文コンテスト

講評

■ 講評 慶応義塾大学 金 奎利さん

このコロナ渦の中、外部で活動するということが難しいので、こうなったらいいのではということを論文にされたと思います。今後また進学されると伺っていますが、社会貢献をするためには、越えなければならない壁がたくさんあります。それはきっと他の方のプレゼンを聴いてこういうことするのかと感ずることができたと思います。ぜひこの経験を活かし、「考えることを実践に移す」ということにチャレンジしてみてください。

■ 講評 名古屋大学 大学院 伊神 裕人さん

私も法学部なので楽しくプレゼンを伺いました。その中で司法にできること、法にできることには限界もあるけれども、法治国家であること、政治主導でなんでも決めるということではなく、司法の場を使ってできる社会を変える力を信じることは、私の法学部の原点を思い返すきっかけになりました。

■ 講評 立命館大学 川端 航平さん・関西学院大学 伊藤 すみれさん

トヨタにとって、アフリカ、特にサハラ以南というのは大変重要な場所です。数年前に元 IMF 専務理事のラガルドさんとお話する機会がありましたが、「これからどこが経済成長しますか」とお聞きしたところ、ラガルドさんは「アフリカです」とおっしゃいました。特にサハラ以南に対して欧米、中国が注いでいる視線は熱いですが、ものすごくハードルの高い地域でもあります。日本がそこでどんなことに関われるか、大変興味深いことと思いますが、ぜひ実地を勉強していただきたいと思いました。





審査委員 武田 一哉氏



国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学 副総長
(情報システム・情報系戦略担当)

■ 総評

みなさんおめでとうございます。たくさんの応募の中から今回みなさんを選ばせていただきました。いろいろな観点でさまざまな議論をさせていただきましてこの結果になりました。みなさんまずは、最終選考 5 編の中に選ばれたということをぜひ誇りに思ってもらいたいと思います。みなさんの論文がいずれも大変優れていたということに感謝いたします。ありがとうございました。

■ 講評 岡山大学 大学院 ホアン・ゴック・ビクチャンさん

発表は外国人技能実習生の方々に日本語コミュニケーション能力を身に付けてもらう、それはひいては多様性のある社会の創造を目指すという提案だと理解しまして、将来の我が国にとって大変重要な問題を取り上げていると理解しました。研究内容はまさにビクチャンさんの外国人技能実習生に対する深い知識とそれから共感というものを根底にした内容になっていて、ともすれば私はこれまで技能実習生の問題について、労働条件等の理解しかありませんでした。非常に高い目線でものを考えられているという点で自分自身非常に勉強になったなと思います。これを研究だけでなく、実際に地域社会で活動を行っていることが大変立派な点で、ここは審査委員のみなさん高く評価されたところです。

■ 講評 金城学院大学 吉田 光里さん

自らの専門とする生活経済を取り上げ、今後の社会の知を支える学びの持続の実現方法を自ら参加する団体の活動を紹介することで、実証的に論じているという論文であり、そこが高く評価されたと思います。大学生が学びつつある結果を市民に教える。こういった方法は大学の知を広く社会に活用するために非常に効果的なやり方だと思いますので、私も参考にさせていただきたいと思います。非常に熱意が伝わる説得力のある論文でしたけれども、一部論理の飛躍がある



講評

と思わせるところがありましたので、今後さらに研鑽を深めていただければと思います。特に参加されている学生、中高生のみなさまの調査、分析等については研究を発展させていただくことを期待しています。

■ 講評 慶応義塾大学 金 奎利さん

食文化の変化によって持続性を向上させる、非常に意欲的な提案だと思いました。論文としてもしっかり構成されていたと思います。菜食による環境の負荷の低減、テンペという食品の可能性、そしてテンペ産地であるインドネシアの社会的課題、この3つの組み合わせは非常に良い組み合わせで、大きな可能性を感じました。一方で企画された実施内容は多岐に渡るので、それが一連のものとして持続的に循環するといったところまでは、かなり期間と資本が必要になると考えられます。ぜひそういった課題についても取り組んでいただければと思いました。

■ 講評 名古屋大学 大学院 伊神 裕人さん

持続性において中心的な課題である温暖化ガスの削減をあつかった論文です。化石燃料を使った発電をすみやかに、あるいはゆるやかに停止・減速させるために、自治体ができる法的な手段について可能性と課題とを非常に丁寧に分析されて、専門外の私にとっても非常に読みやすい論文でした。SDGsの達成にはさまざまな取り組みが必要であり、交錯する利害の中で、現行の法制度で、何ができるかということ調査に基づき客観的に論ずる姿勢というものは専門を学ぶ学生の規範になるものだと感じ、深く感銘を受けました。今後研究を発展させるべき方向や、伊神さん自身のかかわり方についてさらに考えがあれば、議論したいなと思いました。

■ 講評 立命館大学 川端 航平さん・関西学院大学 伊藤 すみれさん

アプリを通じたマッチングで教え手を募るということで、学びの機会を増やして貧困を解決しようとする非常に意欲的なアイデアだったと思います。学び手と教え手をサービスで結びつけることだけでなく、それが人材の投資につながるというエコシステムを考えているところも大変優れているなと感じました。論文はアフリカの現状というものを出発点としていますが、他の地域でも活用できると思いますし、また一方で最低限の観光インフラというものが整備されているということが前提にあると私は理解したので、観光客の呼び込みという投資を教育の機会につなげるという副次的な効果を加速できればさらに大変有利だと思います。今後機会があればぜひ実現に向けてさらに研究を進めていただければと思います。